

生成 AI と学校教育

～メリットと課題を明確にし有効活用を～

文部科学省が GIGA スクール構想を打ち出して、日本中の全小中学生にタブレット端末を配布し、活用を促したのは 2019 年でした。当時、5 か年計画で推進しようとした構想でしたが、それまで日本が世界のトップクラスを走り続けていた PISA テストが下落傾向になったことや、デジタル化が進む世界の潮流を考慮して、いっきに実施したように記憶しています。

私が、2015 年に中国四川省の西安市の小学校を訪問した際、子供たちが、授業で一人 1 台パソコンを使って自由自在に楽しそうに絵を描いていたのを見て、衝撃を受けたことを覚えています。

あれから 10 年、技術革新は日進月歩であり、非常に発達したデジタル環境の中で、教育現場にも大きな影響を与えつつあるのが生成 AI です。これまでは、時間をかけて多くの書籍やインターネット上から情報を得ていましたが、今では、AI が瞬時に目の前に回答を出してくれます。

では学校教育の中で、とりわけ授業の中でこれをどのように活用していったらよいのでしょうか。これについては、教師としてかなり慎重に研究しなければならないことだと思います。なぜなら、AI には、多くのメリットがありますが、また同時に大きな課題ももっているからです。

例えば、2026 年 7 月 23 日付の新聞紙上では、米オープン AI が開発していた生成 AI モデルが、別の米 AI 関連企業に対して自律的に攻撃経路を見つけ、サイバー攻撃を実行したと報じられました。人間の意志を越えて、AI 自体が相手を攻撃するとい

うことがすでに現実になっているのです。

また、7 月 23 日付の別の記事では、米ペンシルベニア大ウォートン校のチームが行った実験結果を報告しています。それによると、AI が出した間違った回答でも 8 割の子供たちが受け入れたということです。さらに、AI に関する論評も載っていて、東大教授の林香里氏は、「AI が利用者の行動や意見を過剰に肯定する傾向が強く、AI にばかり相談していると自分が正しいと感じる度合いが増す」と述べています。開発した自社の AI を再利用する意欲を高めてもらうために、企業側でそういう操作を行っているのではないかと指摘しています。

また、7 月 28 日付の記事では、ある学習塾が保護者に行った調査で、半数の子供たちが宿題や勉強に AI を利用していると報告しています。その記事の中で、塾担当者は「最後は自分の頭で考え、判断する力を育てることが重要だ」と言っています。とても重要な指摘だと思います。

学校現場でも、すでに生成 AI によって教材や資料を作るなど、様々なことに活用している教員も多いことでしょう。これを授業等で使うことを考えると、一旦立ち止まって考える必要があるのではないのでしょうか。生成 AI の使用を否定するのではなく、有効活用していくという前提での話です。

7 月 9 日付の新聞紙上で、情報学者の西垣通氏が生成 AI について論じている文章を紹介します。

「AI は人格を持たない。人の知性を越える“超 AI”なんて、ありゃしない」「人間の知識って、もっと曖昧で複雑でしょ？“感動する”や“おいしいと思う”などの感覚も含めた広範な“生命情報”を起点にした知のあり方を私は理論化した」「AI は既存の情報を統計処理するだけで、データを媒介する

メディアでしかない。個人と社会の相互作用の中で機能する人間の知性とは成り立ちが異なる」「未知の世界を創っていけるのが人間」「教育現場へのAIの導入は、思考力の低下をまねくので強く反対する」「ただ、若者がAIに悩みを相談して救われることは、それなりに意義がある。AIの全てを否定したいとは思っていない」「ビジネスの場でも、どんな質問にもそれらしく回答する“万能AI”を求めるのではなく、業種や業務に特化したAIを開発するなど、あくまで“道具”として利用すべきだ」

私は、7月30日に、東京大学で開催された文科省主催の『教育×生成AIシンポジウム～生成AI時代、学びはどこへ向かうのか～』に参加してきました。その中で、メインスピーカーのOECD教育・スキル局長のアンドレアス・シュライヒャー氏は、次のようなことを述べていました。

「AI活用には、教育的な意図が大事」「スポーツを見るだけではスポーツが上手にならないのと同じで、AIを使って答えを出すだけでは“学び”は深まらない」「タスク（仕事）のパフォーマンスを上げることと“学び”は別」「教師の仕事をAIが代替すると、子供の状況を正しく把握できなくなる」「現在皆が使っている生成AIは“汎用ツール”である。教育に特化した“教育用ツール”を作って、学校ではそれを使うべきである」この最後の意見は、前出の西垣氏の最後の意見と同じことを言っているのではないかと思います。

この講演で、氏はとても衝撃的なスライドを見せてくれました。それは大型トラックが行き交う高速道路上を、幼児が三輪車を運転している写真でした。危険極まりない状況です。氏は、「この道路が現在使われている“汎用ツールAI”で、三輪車の幼児が

このツールを活用している子供たちのようなものだ」と言われたことが、強く印象に残っています。

そしてもう一つ大事なことも述べられました。「日本のこれまでの教育の大きな課題は、子供の“学び”と“評価”を別々にしてしまったことにある。つまり、学習過程（学び）を“評価”するのではなく、その結果（知識）をテストで測ることにしたため、テストで良い点を取ることが目的化してしまった。その結果、逆にテストで良い点が取れるような学習をするように、また、させるようになり、教育そのものがゆがんでしまった。結果だけでなく、学習過程（学び）をしっかりと“評価”してやることが大事である。“教育用AI”を創って使用することで、それを改善できると考える」

さまざまな示唆に富むシンポジウムでしたが、ここで何度も言われていた「学びの評価」や「形成的評価」については、前号(No.28)で取り上げた「OPPA」などは、まさしくそれができる評価法だと改めて思いました。

「最後は自分の頭で考え、判断する力を育てることが重要だ」という指摘を実現するために、私たち教師は何をしたらよいのか。教師自らが研修し、学び、子供たちにとって効果的な活用を模索していきましょう。未来を生きる子供たちのために。

（市川三郷町教育長 渡井 渡）

